

氏 名 宇野 功一

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 173 号

学位授与の日付 平成 19 年 9 月 28 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 都市と祭礼の宗教社会史的研究  
——博多の祇園山笠と松囃子を例に——

論文審査委員 主 査 教授 上野 和男  
准教授 松尾 恒一  
教授 山本 光正  
教授 福原 敏男（日本女子大学）  
教授 坂井 信生（活水女子大学）

## 論文内容の要旨

都市祭礼とは京都の祇園祭に典型的にみられるように、もともとは都市に住む民衆が都市を繁栄させるために自ら創り出し洗練させていった装置である。この前提を切り口とすれば祭礼の社会的・経済的・宗教的な機能をそれぞれ精確に描くことができ、さらにそれらを有機的に関連づけて祭礼の全体像を描くことができるはずである。本論文においては博多の二大祭礼である祇園山笠（伝播元は京都の祇園祭）と松囃子（伝播元は京都の松囃子）を例に、上の見解を実証した。祇園山笠については近世と近代を中心に、松囃子については近世を中心に分析した。

まず、室町・戦国時代の博多と両祭礼（このころには松囃子はまだ祭礼化していなかったが）の様相を検討した。さらに豊臣秀吉によってなされた博多の町割によって、<sup>ながれ</sup>流と呼ばれる七つの町組が江戸初期までに成立したことを明らかにした。江戸時代から近代までの両祭礼は七流によって運営されており、各流では一年交替の当番町を設け、これが費用負担を受け持つなど、流の祭礼運営の中心となっていた。

祇園山笠については、その開始に先立ち、この祭礼に出される山笠と呼ばれる作り山を作るために毎年様々な物品と技術が必要とされた。それらはすべて博多の商工業者から賄われた。そのため博多内で金銭が活発に融通した。祇園山笠が始まると近在近郷からこれを観るために大勢の観光客がやって来て宿泊をしたり諸物品を購入したりした。彼らの消費行動により博多外部から博多へと金銭が集中した。毎年決まった時期に祇園山笠という大規模な祭礼をおこなうことで、博多の経済が活性化したのである。多数の人口を養っていかなければならない都市社会にとって、これは重要なことであった。

松囃子についても同じことがいえる。とくに寛保2（1742）年に福岡藩から両祭礼にいくらかの助成金が支給されるようになってからは、松囃子には多数の作り物や芸事が出されるようになり、大規模化した。そのため祭礼の準備に関係する諸産業（祭礼産業）と観光客相手の諸産業（観光産業）も拡大した。

両祭礼の準備と実施は博多の経済構造の一部をなしており、経済面で博多という地域社会の繁栄と再生産に寄与した。

大勢の観光客を集めるためには祭礼を魅力的なものにしなければならない。大規模で美しい祭礼を反復するためには、複雑かつ機能的に組織された大きな集団と、統制の取れた集団行動と、高度な技術を伴う手工業とが必要とされる。

都市に住む大勢の住民こそは都市最大の資源である。これを可能なかぎり多く動員することで大規模な祭礼は実現される。両祭礼の実施にさいしては、町と流、そして町ごとに存在した年齢階梯制（男性のみの結社）が祭礼組織として機能し、多数の住民を動員した。動員された住民たちは厳格な上下関係のもとで各自に要求される役割と規範に従って行動した。こうして両祭礼を通じて社会教育がなされ、人材の育成が実現された。一方、各種の優秀な手工業者を動員することで美しい祭礼は実現される。両祭礼の準備にさいしては博多の手工業の粋が集められた。両祭礼の実施は博多の手工業の技術の発展を促すことにも繋がり、博多の製品の価値を高めた。

大規模な祭礼を実施するには政治権力の協力も不可欠である。藩政期には福岡藩が両祭礼の実施に協力した。とくに享保17（1732）年の大飢饉後、衰退してしまった両祭礼の復興に福岡藩は力を尽くした。これはかなりの成果を挙げた。

廃藩置県後、福岡県や福岡市（1889年、福岡と博多を市域として成立）は祇園山笠の実施には協力的ではなかった。経済活動の近代化や都市の近代化の障害になるとしてその実施にしばしば圧力を加えたのである。しかし明治末期ごろからは観光資源として祇園山笠を振興する動きが行政側にも徐々にみられるようになった。これは、行政の望みにもかかわらず、近代の博多（より正確には福岡市全体）には大規模な工場や企業がほとんど設立されず、昔ながらの小規模経営の商工業者が多く、そのため祇園山笠（および松囃子）を中核とする経済構造の必要性が衰えなかったためである。

ところで明治末期以降の日本では慢性的な不況が続き、博多においても町々の経済力が低下し、祇園山笠の実施は困難になっていった。このような状況を受け、祇園山笠関係者の働きかけで昭和前期になると福岡市と地元財界は祇園山笠にたいする補助金を山笠当番町（祇園山笠には、ほかに能当番町があった）に交付するようになった。祇園山笠の意味づけが「博多の」祭礼から「福岡市の」祭礼に変わる第一歩を踏み出したわけだが、この意味づけは戦後の祇園山笠再編のさいに前面に出て来ることになった。祭礼集団が祇園山笠を継続するために、その舞台を必要におうじて博多といたり福岡市といたりする言説上の戦略を採るようになったからである。

大規模な祭礼を実施するには多額の金も準備されなければならない。両祭礼とも各種の当番町が費用を用意したが、とくに山笠当番町の負担は大きかった。江戸後期の二つの個別町と近代の一つの個別町を例にそれぞれの町内における山笠当番費用の徴収法を解明した。その方法は三者三様であったが、いずれの町においても当番費用負担者層と当番運営者層とは原則的に一致しており、かつそれらは日常生活における町の活動の運営者層（江戸時代には町中<sup>ちやうじゆう</sup>と呼ばれた）とも一致していた。そしてそれらの層が町内に存在する家屋敷の所有形態・借用形態の変化に伴い変容したという事実も解明した。

大規模な祭礼を実施するには信仰の共有も必要である。ただし両祭礼とも信仰の内容は変化した。松囃子はほんらい単純な福神信仰にもとづく祭礼であったはずだが、18紀中期までに、近隣村落で広くおこなわれていたトビトビという儀礼の影響を受けて交易神と水神という神格が付加された。祇園山笠は疫神を歓待し鎮送することで疫病の発生・流行を予防する祭礼であったが、明治中期に創出された祇園山笠の起源伝承にもとづき、これに変化が生じた。その伝承というのは鎌倉時代の博多に発生した悪疫をある僧侶が退散させたというもので、その僧侶の悪疫退散の行動を模倣することで疫病の発生・流行を予防できると信じられるようになった。両祭礼とも、変化後の信仰も博多の住民に広く受容された。そして両祭礼を繰り返すことで信仰の共有が確認された。

結論としては、両祭礼には以下のような機能があり、相互に密接に結び付いていたといえる。第一に、博多内での成員の社会教育がなされるとともに社会構造の維持がなされた。第二に、博多と周辺村落との社会的・文化的関係の維持がなされた。第三に、毎年特定の時期に博多に富が集中したので、博多の経済活動に役立った。第四に、博多内での信仰の共有が確認された。なお本論文では詳述できなかったが、これらの機能は今日でも多少は存続している。

## 論文の審査結果の要旨

宇野功一の論文「都市と祭礼の宗教社会史的研究－博多祇園山笠と松囃子を例に－」は、室町期から近代（昭和初期）に至る博多の都市祭礼を博多祇園山笠と松囃子に焦点をあてて通史的に考察した宗教社会史的研究である。

最近、ますます盛んになりつつある都市祭礼研究のなかで、本論文は、祭礼という宗教現象の社会的・経済的側面に注目し、各種の歴史的資料を駆使しながら、長い歴史の中で特定の都市の祭礼がどのように変化したかを宗教社会史の視点から考察した意欲的な論文である。本論文が考察した博多の都市祭礼については、各時代の祭礼内容を中心とする個別的な研究は、これまでも数多くの論考があったが、本論文のように、博多の都市祭礼を通史的に考察し、歴史的展開を通して博多の都市祭礼の全体像にアプローチしようとした研究はなく、この意味で本論文は、博多の都市祭礼研究の新たな展開を提示する研究といえる。著者は祭礼の社会的側面、すなわち、博多の都市祭礼を支える祭祀組織に焦点をあて、「流」「町」などの地域組織と祭礼との関係を中心として祭礼を考察した。とくに、近世に整備された「流」「町」などの地域組織の形成過程とその後の歴史的展開を詳細に検討し、現代に通じる博多祇園祭礼の社会的性格を明らかにした点は、本論文の最も注目される貢献である。方法論的には、神社文書、町内文書をはじめとして、広く歴史的史料を渉猟するとともに、民俗学的・社会学的な聞き取り調査の資料を加えて、多角的な実証的研究を試みた点は、きわめて有効な方法として評価できる。

本論文では、「序論」において都市祭礼の研究史と問題点および博多の都市祭礼に関する研究史を検討したあと、第一章「室町・戦国時代の博多と祇園山笠・松囃子」において、室町・戦国時代の祭礼を概観し、第二章「近世博多の社会構造と町政機構」、第三章「祇園山笠の実施による博多の再生産」において、近世を中心に祭礼と社会構造の関係を考察した。第四章「福岡藩による祇園山笠振興策と藩主の上覧」では、博多祇園祭礼をめぐる藩主権力との関係を検討し、つづいて第五章「藩政期の松囃子に見られる儀礼の二面性」において、新年祝賀儀礼である松囃子における藩主と町人との対抗関係について論じた。さらに、第六章「江戸後期の個別町の社会構造と山笠当番経営」、第七章「近代の個別町の社会構造と山笠当番経営」において、近世、近代における当番町の祭礼費用負担方法に差異について詳細な分析を展開した。第八章「儀礼、歴史、起源伝承」においては、博多祇園祭礼の起源伝承が明治期に改変され、改変された起源伝承が博多の住民に受け入れられ、現代に至るあらたな「信仰の共有」が成立する過程について考察している。これらの分析を通して、博多の都市祭礼は、近世・近代において博多の社会的再生産に宗教的、社会的、経済的に有効な機能を果たしたと結論づけている。

本論文においてとくに注目すべき諸点は以下の通りである。

第一は、他の都市祭礼と比較して、博多祇園祭礼の著しい特徴は、山笠の大型化・華美化、巡行の速さなどにおける「流」「町」などの地域組織間の競争にあるが、競争をもたらした要因が、「流」「町」間に存在する対等性原理と、華やかさを競う「風流」としての祭礼の展開など、祭礼をとりまく社会経済

的变化にあることを明らかにした点である。

第二は、祭礼と社会との関係を明らかにするために、祭礼の運営方法、特に経済的な経費負担の問題について、三つの町の史料を町の構造と関連において詳細に考察を試みた結果、経費負担方法の変化について、いくつかの基本的なパターンが認められること、そのパターンの差異は住民構成の変化など町内の社会構造にあることを明らかにした点である。また、基本的に年齢階梯制にもとづいて組織された各町内の祭祀組織が、社会教育制度としても機能し、結果として祇園祭礼の基盤となる町内の組織の維持に貢献してきた事実を明らかにした。

第三に、これまで本格的な論考がなかった博多松囃子についてはじめて体系的な検討を試みるとともに、福岡藩、福岡市などの政治権力との力学的関係や、加勢人・祭礼見物などの場面に見られる周辺地域との関係、祭礼と地場産業との関係などについても考察を加え、博多の祭礼の内部的構造分析にとどまらず、祭礼をとり巻く外部的条件との関係についても幅広く考察を加えた点である。とくに権力との関係の分析は、これまでの博多の都市祭礼研究には見られなかった新たな視点であり、祭礼研究のあらたな展開につながる視点として評価できる。

第四に、博多祇園祭礼の起源伝承と近代に作られた新たな言説の生成についても考察し、現在支配的な博多祇園祭礼の起源伝承が、実は明治中期に、それまでの伝承を修正する形であらたに生成されたものであることを明らかにした点である。都市祭礼は、しばしば近世後期から近代にかけて、その起源伝承や儀礼内容が再編成される例が多いが、こうした近代における祭礼の再認識過程の問題についても踏み込んだ考察を展開した。

しかしながら、本論文にはいくつかの問題点と課題があることも事実である。第一に、著者は、本論文の目的に即して、都市祭礼を「都市に住む民衆が都市を繁栄させるために自ら創出していった装置である」と戦略的に概念規定しているが、これは都市祭礼の社会的効果にやや偏った規定であり、今後は都市祭礼の内部構造をも含めた概念規定が必要であるとの指摘があった。第二に、博多の祭礼が博多という地域社会の繁栄に貢献してきたと結論づけているが、こうした効果についての実証は必ずしも十分ではない点である。資料的制約はあるものの、さらに資料を発掘してこの点の実証的分析を進める必要がある。第三に、著者は松囃子行事における権力との関係の分析において、町人が藩主を祝福する「奉祝」の側面ばかりでなく、神が藩主や町人を祝福する「下祝」の側面が存在し、このことが、藩主と町人の対抗関係を生じさせていると分析しているが、ここで示された奉祝と下祝の概念についても十分検討されていないとの指摘があった。

本論文には、このようないくつかの問題点と課題があるが、博多の都市祭礼について体系的な考察を試みた本格的な論文としてその意義は高く、また、今後のあらたな都市祭礼研究の展開が期待される点において、学位を授与するに値する論文であると審査委員全員一致して判定した。